佳作

スポーツは楽しむことから

吹田市立豊津西中学校三年（大阪府）
冷水（ひやみず）　楓（かえで）

「できたー。」肩にのっている測りしれない不安がとれると同時にスポーツをする楽しさを知った瞬間であった。

九月に入り、新学期が始まった。長い長いと言っていた夏休みもあっという間、台風のように過ぎ去り本格的な受験への一本道がみえてきた。受験については現実をみたくない部分もたくさんあったが、毎年中学三年生が通る道なんだと決意を心に決めていたため、さほど苦ではなかった。それに私の苦手なプールも終わり、陸上にもどるという事もあって気分もよかったのだ。だからといって陸上競技が得意だったわけではない。「体育」という教科自体に苦手意識をもっていた自分が心のどこかに隠れていたのだ。今振り返ればそう思える。そんな太陽がギラっと光っているグラウンドで私達は「ハードル」を授業で取り組んだ。テレビや本でみる「ハードル」は、私の中で軽やかに跳ぶイメージそのものであった。しかし実際は違った。軽やかなのは最初だけで最後のときには体力を奪われてヘトヘトであった。こんなに体力を使う競技だとは全く思っていなかったのでプレイする「ハードル」については三百六十度、イメージが変わった。週三回の授業を何回か受けていくうちにハードルに対しての恐さはどんどんなくなっていき、夢のまた夢であったインターバル七メートルも練習の最後に跳ぶことができた。そのとき先生は「挑戦することとおもいっきりが大事。」と言っていた。このときはこの言葉について何も思わなかった。そしていよいよテストの時間がやってきた。テストの内容は、まず自分が挑戦するインターバルが跳べるか。そして次の授業でタイムを測るというものであった。私はまず六・五メートルに挑戦した。が、二、三本目ぐらいでハードルを倒してしまった。練習では倒したこと無かったのに。なんで。私の心はその思いでいっぱいだった。二回目。またハードルを倒してしまった。その上、こけて膝からは血がでた。なんでと思う気持ちをよそに私は先生に何ができていないのか聞きに行った。すると先生は「練習のときみたいに足が前に出てない。あとはおもいっきりだけや。」と言った。跳んでる自分でさえ自分の事が分かっていなかった。それが悔しくて自然と目に涙が浮かんできた。それをぐっとこらえながら膝を洗いに行った。洗い終わると絶対に跳ぶと心に決めて戻った。もう跳ぶことに迷いなんてない。自分を信じよう。それだけだった。みんなの声援を背に、私は走った。「やった。跳べた。」顔の筋肉がいつのまにかゆるんでいた。とても嬉しかった。けど私のゴールはここではなかった。そう、「挑戦すること」先生の言葉を思いだしたのだ。インターバル七メートルのスタートライン。風を味方につけておもいっきり走り始めた。そして全て跳ぶことができた瞬間、この気分を味わうことができたのだ。

私はこの事を通して三つ学んだ。一つ目は仲間の大事さ。みんなで取り組まなかったらきっと最後までやりきるなんてできなかったと思う。時には味方、時にはライバルになる。そんな仲間がいて初

めてスポーツは成り立つのだ。二つ目は希望を持ち続けること。何でも諦めなければ何かいいことが返ってくる。これは精神面を強くすることにも繋がるから一石二鳥である。三つ目は楽しむこと。私が一番できていなかったのはきっとこれだろう。できる、できないの以前に好きになるのだ。楽しいと思えば前向きになり意欲が増してくるはずだ。スポーツとは互いの能力を比べあい、認めあうものである。これからはスポーツの楽しさをもっと多くの人に広めて是非この気分を味わってもらいたい。